

平成21年度 福祉・障害児教育研究所事業報告

菊池 信子

KIKUCHI Nobuko

平成21年度の福祉・障害児教育研究所の主な活動は以下のとおりである。

I 平成21年度の福祉・障害児教育研究所シンポジウム

1 平成21年度第1回シンポジウムは、平成21年7月18日（土）に本学421教室において開催された。

時 間：13時30分～16時30分

テーマ シンポジウム「豊かな人生を送るために今からできることを考えよう」

講演「これからの豊かな生活のために、いまから考えることー経済的な計画を中心としてー」

講演者：井戸三枝氏（ファイナンシャルプランナー）

パネルディスカッション「豊かな生活への取り組みー実践活動から」

パネリスト1

岡村 秀子 氏（La. 沙風 代表）

上演ボランティア活動 地域社会への参加について

パネリスト2

大封香代子 氏（女性農業士）

就業への取り組みから 女性による農業活動

パネリスト3

代表 副島 茂 氏（げんき KOBE）

地域社会を広げるネットワークづくり メディアからの発信活動

コメンター

井戸美枝 氏

参加聴衆者：地域住民等学外参加者約 20人

本学学生教職員 100人

内訳（男女別 男10人、女110人）

本シンポジウムは、神戸市北区社会福祉協議会と

共催で開催され、後援として、神戸市、神戸市社会福祉協議会、神戸市北区民生委員児童委員協議会、北区南部地区社会福祉協議会、からの協力が得られた。その結果、活動に関連のある方を始めとして地域住民の参加が得られた。長寿社会を、経済的にはどのように準備し、また活動の時間を有意義なものにするために、若いときからの地域活動、経済活動、メディア活動が時間とともに地域の理解とネットワークを広げ、理解が深まる様子について、それぞれの活動の立場からわかりやすいお話をしていただくことができた。

2 平成21年度第2回シンポジウムは、平成21年11月21日（土）に本学421教室において開催された。

時 間：13時30分～16時30分

テーマ：シンポジウム「スポーツと福祉」

I 部 基調講演「スポーツとわたし」

講演者：長尾喜章氏（陸上車いす短距離パラリンピック日本代表）

II 部 パネルディスカッション「スポーツと福祉」

パネリスト：

藤田多佳子氏（水泳パラリンピック日本代表）

大久保正樹氏（（財）神戸市障害者スポーツ協会 スポーツ指導員）

福井 照久氏（（社）神戸市視力障害者福祉協会副会長）

新田 恵（本学学生 障害者スポーツ大会（のじぎく国体ボランティア学生代表））

コーディネーター：

大久保正樹氏

参加聴衆者：地域住民等学外参加者約 6名

本学学生教職員 約 70名

内訳（男7人、女69人）

本シンポジウムは、「スポーツと福祉」の関わりについて、障害者スポーツの国際的競技経験者や、スポーツをとおしての人との交流が人生を豊かにする体験等についてお話しいただいた。それぞれの立場から、競技の映像をとおしての切迫感ある大会の様子、練習の厳しさ、競技から楽しみを目的とするスポーツへ、ボランティアとして障害者スポーツに関わる経験から得られたことなどを報告していただき、スポーツと福祉の関係について考えるよい機会となった。

II 研究グループの活動

1 ダウン症児子育て支援講座

ダウン症児子育て支援講座は、石岡准教授を中心とした研究グループで、毎月1回（平成21年度は年間10回開催）、ダウン症児とその家族への支援講座を開催した。

内容は、毎月1回日曜日にダウン症児（概ね10組）とその家族に対して子育て支援としてのグループ療育を行ったというものである。ダウン症児とその兄弟姉妹に対しては、主に音楽遊びや制作遊びを中心とした発達支援プログラムを提供し、その保護者に対してはピアカウンセリングの実施も行った。

2 自閉症児個別支援プログラム

自閉症児個別支援プログラムは、石岡准教授を中心に、毎月2回、自閉症児とその保護者に対して開催（1ケース年間24回開催）した。

内容は、毎月2回土曜日に自閉症児とその保護者（3組）に対して個別プログラムを提供するものである。自閉症児に対しては時間的・物理的に構造化した環境を設定し、主に学習課題獲得のためのプログラムを提供し、その保護者に対しては個別のコンサルテーションを実施した。

上記2つのプログラム活動は、地域の広汎性発達障害児の早期教育の研究・開発、障害児を養育する親へのエンパワメント、コンサルテーションの実践を伴う研究活動であり、利用者側からは好評を得ている。

なお、次年度からこれら2つのプログラムは、担当教員の学科異動により、子ども教育研究所に移管される予定である。

まとめ

平成21年度の福祉・障害児教育研究所の主な活動は、以上のとおり、地域性、継続性、利用者効果の手応え、研究実績としても、順調に実績を伸ばしている。